

第4回星野立子新人賞

手毬つく

涼野 海音

海光に眼をひらきたる子猫かな  
返事せぬ男の子がひとりあたたかし  
ビー玉の空の色なる春休  
鳥籠に鳥の骸や春の夜  
水温むベンチに手紙読んでをり  
散らかれる部屋の隅なるヒヤシンス  
すれ違ひたる遠足のもう遠き  
坂の上の家灯りたる啄木忌  
かげろふへ鶏は目を開けしまま  
球場の跡に摘みたるクローバー  
居残りの子らに柳絮の飛びにけり  
マンションの灯りそめたる花疲  
桜葉降る夜のピアノ閉ぢにけり  
鳶の輪の中の青空春惜しむ  
青芝の真ん中に立つ背広かな  
蛇の衣天王山に吹かれをり  
釣堀に一番星の映りたる  
ひとすぢの道に玉虫死せるのみ  
父の日の拳に夕日とどまれる  
蛇打ちし棒黒々とありにけり  
山鳩の声遠くより昼寝覚  
箱庭の一粒の砂ひかりけり  
毛虫焼く火に恋文を破り捨つ  
蛭狩回送電車過ぎゆけり  
海峡に朝来つつあり夏みかん

父と子の間に回る扇風機  
帰省子のポメラニアンを連れてきし  
水澄みていづれの山も遠からず  
木犀の香り移れる背広かな  
東京にあふ人のゐる秋の雨  
うそ寒や紙幣数ふる指の先  
武蔵野の空のまぶしき案山子かな  
運動会額に風の立ちにけり  
水色の原稿用紙小鳥くる  
めとりたき人にどんぐり拾ひけり  
口ずさむ啄木の歌鳥渡る  
月の色して螿螂の枯れゆくか  
小春日の草のにほひの乳母車  
だれもぬぬベッドあたたか冬の鴟  
日輪の下へ飛びゆく木の葉かな  
三冊子読みつつみかん剥いてをり  
手のひらに川のにほひや日向ぼこ  
ネクタイを吊る凍星のあまたなり  
冬帝の下を歩いてゐる子かな  
良寛の風の一字や冬籠  
狐火の吸ひ込まれたる闇深し  
煤払終へ大粒の星ばかり  
いくたびも職変へし年逝きにけり  
雨音のかすかに昼の雑煮かな  
手毬つく音のだんだんわが音に